

薬学部総合研究棟新築の顛末

認知症先進予防解析学分野・旧神経科学 特任教授 鈴木 利治

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、多くの人にとって初めて体験する大規模な地震災害として記憶に残っています。札幌地区は大きな災害はありませんでしたが、薬学部の建物は大きく長期振動し、壁に亀裂が走る被害も出ました。当時の薬学部の建物は、1960年代に竣工した建築物で、1995年の阪神淡路大震災の教訓から1996年に耐震改修されました(この経緯については、加茂直樹著「薬学部大型改修工事(1995年—1997年)」、芳香 HISTORY-17 参照)。東日本大震災を受け、2012年に再度耐震改修を行う案が大学本部施設部より提示されました。一回目の改修工事の大変さと苦勞を知る 松田彰 研究院長(当時)を始めとする先生方からは、「建て替え・新築を要求すべきである」という意見が多く出ていました。実際に薬学部の隣にあった、旧電子研の建物は、薬学部の建物と2年程度しか施工時期が変わらないのに取り壊されて、新しい研究棟が北キャンパスにできました。現実的にも、研究機器の大型化や大学院重点化に伴う大学院生の増加などから、改修工事中に一時避難する場所の確保が難しく、教員からは「耐震改修は行わなくても良い」という強行意見も出ていました。この時期に建物委員会委員長を拝命したのが私で、任期終了後は引き続き佐藤美洋先生が委員長として引き継がれました。

2012年頃から施設部との交渉が始まりました。当時の薬学部は廊下の片側にフリーザーや機器類・ロッカーが隙間なく並べられており、大学法人化後の札幌市消防局の視察でも、毎年「廊下に物品を置かないでください」と注意勧告を受けていました。私は、「これらを全て室内に入れた場合のほうがむしろ危険である」と答弁したのを覚えています。こういう状況や、狭い学生実習室、各研究室に密集して実験する学生の姿を施設部の人に見てもらい、前回改修時のように建物の半分を空にして改修することは現実的ではないことを理解してもらうように努めました。施設部の人達も、薬学がこんなに heavy に研究・教育を行なっているとは思わなかったと、認識するようになり(講義室だけが並んでいると考えていた節がありました)、新棟(現在の総合研

究棟)増設の話が出ました。とは言っても、元々の建物(現在の管理研究棟)はやはり改修を行い全面新築はしない方針は変わりませんでした。

新棟を薬学の南側に建築し、管理研究棟の西半分を新棟に引っ越しさせて、管理研究棟の西半分を最初に改修しました。東半分に残った研究室を改修後の西側に移動させ、東側半分を改修後に西側に偏っていた3研究室を東方向に移動して調整・・・という方針で改修計画が決定しました。「全部新築したほうが簡単だろう?」と誰もが思う案で新棟増設+管理研究棟改修を行う計画となり、面倒だとは思いましたが、薬学全職員悲願の面積純増でしたので、この計画で具体的に増築、改修を進めることになりました。

委員長であった私は、新棟の設計に大きく関わりました。研究室は基本構造として小部屋を作ることなく大きな空間として確保し、その中を各研究室の研究に合わせた仕切りが可能なように施設部と交渉しました。機器室は地下に配置し、1階は RI 施設と動物飼育施設(SPF)を配置することにしました。ご存じのように薬学の RI 実験施設は薬学の西側に小さな老朽化した建物として存在しており、「雪降る中を一度外に出るのかよ?」という環境で、「近いうちに改修」という状況は目に見えていました。また、前回の改修時に増設された「動物舎」は、遺伝子改変マウスの作成などで、増加するSPF飼育と高度な実験に対応することが難しくなっており、空調設備の老朽化も著しかったため、両施設を新棟内に設置することは研究・管理上も重要でした。両施設はもう少し広い面積を確保して設計する予定でしたが、途中から経費の点で地下に設置する機器室を1階に設置する変更を受け、少し(大分?)狭くなりました。薬用植物園側から総合研究棟を見ていただけるとわかるのですが、3階から上が狭くなっています(写真)。これは大学の建物に面積制限があるため意図的に狭くしたもので、「1、2階と同じようにまっすぐに建てても工費はさして変わらないだろう?」と設計段階で尋ねた記憶がありますが、そうはなりませんでした。その結果は各階に男女のトイレを設置できなくて、階ごとに交互に男女トイレを設置するこ

とになりました。また、学生がプラプラできるアメニティスペースも全く新棟にはできませんでした(改修後の管理研究棟2階に確保しました)。共同研究者がいた九大の工学系の建物にはパウダールームと書かれた部屋があった(女子学生が少ないにも関わらず)のを思い出し、アメニティスペースなどの必要性も交渉しましたが3階以上は広くはできませんでした。ただし、昔いた国立の研究所や米国の大学で常備されていた非常用電源はかなり強く要求し設置されました。この設置は胆振東部地震の際の2日間に及ぶ停電時に威力を発揮しました。

新棟は5階建てですが、6階建てにして最上階を広い講義室にしたらどうかという意見も出しましたが、もちろん(予算や面積制限の関係で)全く受け入れられませんでした。COVID-19の感染が拡大したここ数年の事態を考えると、広い講義室があったらどんなに役立ったか残念ではあります。工事の進捗状況は管理研究棟の上階からよく見えました。まず、予想通りのアイヌ民族の遺跡が発掘され、発掘調査のために本工事は始まりませんでした。これは想定内。想定外であったのは、地面を掘削した際に大量の水が湧き出し、この排水に一日10万円程度かかり予算がどんどん減少していきました。新棟の外壁はタイル張りになる予定でしたが、排水費用がかさみ、タイルに似た色のペイント仕様になりました。表通りの銀杏並木からあまり見えないのですが、少し安っぽくは見えます。見かけだけでなく、タイル

の方が外壁の劣化を防ぐ効果が高いので、おそらく定期的に塗装しないと建物自体の劣化も進みます。

さて、現在管理研究棟と新棟(総合研究棟)は、2階でやや妙な形で接続されています。当初「接続しやすい位置に新棟を建てたらどうか?」という交渉も行いましたが、現在の新棟の周囲には電線やら何やらが埋まっている共同溝があり、これを壊したり移設したりしない形で建物の設計が行われており、「もう少しずらせよ」という意見は全く受け入れられませんでした。「管理研究棟と新棟を一階でもつなげよう」という提案もしましたが、面積制限の点からこれも結局できませんでした。新棟完成後も細かな点で「え?」と思うような箇所はいくつもありました(なにせ短期間に見慣れない図面を見ながら素人が確認してゆく作業を皆が行なわざるを得ない状況でしたため)が、それでも年配の先生方には「悲願の面積純増」であり、廊下にフリーザーが立ち並ぶ光景(違法です)は無くなりました。引き続き、管理研究棟の耐震改修が行われ、こちらは佐藤美洋先生が委員長として進められました。古い建物の再改修で予算も限られていて入札業者がなかなか決まらない状態で始まりました。当初はトイレなども全て洋式にして一新する予定でしたが、予算の関係で耐震に重点が置かれ、耐震と関連性が低い箇所までは改修が十分に行われなかった感は否めません。講義室も広くはなりましたが、構造上柱を動かすことはできず、オペラハウスの partial view のような席ができてしま



写真は完成直後の2014年5月13日に植物園側から撮影した夕暮れの新棟です。こちら側から新棟を見ると、2階まで(壁面が茶色の部分)は幅広になっていますが、3-5階の研究室(壁面が白色の部分)は狭くなっていることがよくわかります。新棟の薬用植物園側には、BBQスペースが設置されています。

ったのも学生には気の毒でした。これも、その後の COVID-19 の感染状況を考えると、本来は講義棟も新築すべきであったかと思います。大学の設備って、長い目で見ると「安物買いの銭失い」感が依然として漂うので、改善の余地はあるでしょう。

前回の改修工事の報告は物理化学の教授であった加茂先生が、時系列や面積をきちんと報告されていました(芳香 HISTORY-17)。私は、記憶に残っている印象的な事柄を主に書かせてもらいましたので、もしかしたら事実と齟齬があるかと思いますが、「こんな感じだったのか」と思っただけならば幸いです。

なお、最後になりましたが、新棟(総合研究棟)は2014年に完成し、ゴールデンウィーク前後に引っ越しを行いました。2階に広い学生実習室、顕微鏡室など、3階には分子生物(現 RNA 生物学)と精密合成化学、4階には薬理学と薬剤分子設計学、5階には神経科学(現 認知症先進予防解析学)と生体分子機能学の各研究室が入っています。管理研究棟は、これまで各階4研究室でしたが、3研究室となり広がっております。卒業生の皆様、薬学部を訪れる時がございましたら、どうぞ探索してください。

同窓会 HP:2023年2月10日公開